令和6年　春季俳句講座
「第一句集を読む―師系を超えて(7)」

★第1回　加藤かな文　『初鴉』高野　素十

「素十の素」

素十俳句の手ざわりは、素直、素顔、素焼、素手とか、素十の素を連想させる。でも本当にそうなのだろうかちょっと疑いながら読んでみたい。

動画配信日時　4月16日(火)10時より

★第2回　髙田　正子　『おりいぶ』飴山　實

「孤絶のわざへ向かって」

のちに仙境とも呼べそうな抒情世界を作り上げた實の出発点は社会性俳句であった。欣一に兄事し、兜太と交友を深め、自己発見への道を模索する若き實の作品を読み解こう。

動画配信日時　4月23日(火)10時より

★第3回　山尾　玉藻　『群萌』大石　悦子

「柔らかな遊びごころ」

大石悦子は古の詩歌や文学を基調とした独自の句境を開いた俳人であり、その深部には常に遊びごころが息づいていた。その遊びごころを探り学びたい。

動画配信日時　4月30日(火)10時より

★第4回　仁平　勝　『鳥子』攝津　幸彦

「俳句的というパラダイムを離れて」

攝津幸彦の俳句が「難解」といわれるのは、それが一般に「俳句的」といわれるパラダイムから逸脱しているからだとすれば「難解」な作品を読むには、まず、そうしたパラダイムを離れる必要がある。

動画配信日時　5月7日(火)10時より

プロフィール

経歴

1961年9月6日　愛知県生まれ

1984年4月から2022年3月まで
愛知県立高校教員（国語科）

2022年4月から　学校法人桜花学園高校教員（国語科）

1993年　「槐」入会

1997年　第6回「槐」賞受賞

1999年　「槐」編集担当

2001年　「槐」を退会、児玉輝代らと「家」を創刊し、
編集発行人

2009年　句集『家』（ふらんす堂）を刊行

2010年　第33回俳人協会新人賞を受賞

2011年　児玉輝代の死去にともない「家」代表を引き継ぐ

現在　「家」代表・編集発行人、
俳人協会評議員、
日本文藝家協会会員

素十の素 ❶1923年 俳号について

本名　高野與巳(たかの　よしみ)　與 → 与

生年　1893年(明治26年)　3月3日　茨城県生まれ

没年　1976年(昭和51年)　10月4日　享年83

素十の素

「素直」ありのままで、飾り気のないようす。

「素手」手に何も持っていないこと。

「素顔」化粧をしていない、地のままの顔。

「素肌」化粧したり衣類をつけたりしていない肌。

「素足」はだし。靴下や足袋をはいていない、むきだしの足。

「素焼」うわぐすりを施さずに焼いた陶磁器。

素十の十

「十分」物事が充実し、完全であること。

「十全」少しも欠けたところがないこと。

素十の素　❷1947年『初鴉』高浜虚子の序

序

夙くに出づべきはずであつて出なかつたのが、素十君の句集である。①素十君は文学といふやうなものにはあまり興味をもたないやうである。興味がないわけでもあるまいが、素十君を満足せしめるやうな文学は容易に見つからないのであらう。が、その素十君が俳句を最もすぐれたる文芸として、今日まで身を打ち込んで来たことはあらそはれない事実である。

磁石が鉄を吸ふ如く自然は素十君の胸に飛び込んで来る。素十君は劃然としてそれを描く。②文字の無駄がなく、筆を使ふことが少なく、それでゐて筆意は確かである。③句に光がある。これは人としての光であらう。

古今を通じて素十君の句は独歩であるが、まづ聯想するものは、元禄の凡兆ぐらゐなものであらうか。凡兆の句とも違つてゐるが、強いて類を求むれば、まづ猿蓑の凡兆を考ふべきであらうか。然し句の光といふものは、素十君の独り擅まにしてゐるところである。この光といふものを説明することはむづかしく、素十君自身にもわからんかしらんが、その人とその技巧から来てゐるものと思ふ。凡兆にもいくらかあるかと思ふが、然し素十君には及ばない。

かう述べてくると、素十君の句を無上に褒めるやうになるが、然しこの讃辞をうけとるものは、まづく素十君のほかにはあるまいと思ふ。

④今迄多くの人が争うて句集を出してゐる中に、素十君は全く無頓着であつた。句集を出す面倒をする暇に、一句でも作りたい、といふのが、その本心であらう。

素十君にしたところで、⑤時には詰らぬ句を作ることがある。それは素十君の胸に宿つた自然が詰らぬのではなく、それを現す適当な言葉が見つからなかつた時のやうである。

素十君をしてつひに句集を出さしめた青柿堂主人の労を多とする。

昭和二十二年五月十二日

小諸俳小屋にて

高浜虚子

①素十は文学には興味がない。

②素十はすっきりした俳句をつくる。

③素十の人間のよさが俳句にも出ている。

④素十は承認願望が弱い。

⑤素十は失敗作もつくる。

素十の素 ❸1923年 初投句で初入選

初投句で初入選

1923年(大正12年)12月号 ＊30歳

1 門入れば竈火見えぬ秋の暮

2 せせらぎや石見えそめて霧はるる

3 秋風やくわらんと鳴りし幡の鈴

4 月に寝て夜半きく雨や紅葉宿

震災直後の投句

1924年(大正13年)1月号 ＊30歳

5 箒さき吹き返さるる落葉かな

6 冬の蜂おさへ掃きたる箒かな

1924年(大正13年)2月号 ＊30歳

7 凍鶴のやをら片足下しけり

初巻頭

1926年(大正15年)9月号 ＊33歳

(打水や萩より落ちし子かまきり)

74 雨晴れてちりぢりにある金魚かな

75 門川をやがてぞ去りぬ霊送

76 露けさや月のうつれる革蒲団

77 蟷螂やゆらぎながらも萩の上

1927年(昭和2年)1月号 ＊33歳

88 柊の花一本の香かな

89 漂へる手袋のある運河かな

素十の素 ❺1927～28年 初期の注目句

1927年(昭和2年)4月号 ＊34歳

101 ひざまづき蓬の中に摘みにけり

1927年(昭和2年)8月号 ＊34歳

117 蟻地獄松風を聞くばかりなり

1927年(昭和2年)9月号 ＊34歳

119 方丈の大庇より春の蝶

1928年(昭和3年)1月号 ＊34歳

134 まつすぐの道に出でけり秋の暮

1928年(昭和3年)3月号 ＊35歳

143 また一人遠くの蘆を刈りはじむ

1928年(昭和3年)4月号 ＊35歳

149 摘草の人また立ちて歩きけり

素十の素 ❻1931年 秋桜子との訣別

①1930年(昭和5年)「まはぎ」7月号

中田みづほ・浜口今夜による連載対談「句修業漫談」第8回

「秋桜子と素十」

・みづほの発言より

秋桜子、秋桜子の句は……

「俳句では現はせぬことはないといふ気魄」「外へ外へ、広くく」「大作」「(怪しく思ふのは)秋桜子君が自分の行き方の是なるを認める他面に於て、素十君の行く道を是認しないこと」「恍惚境に誘はれる」

素十、素十の句は……

「狭く狭く内へ内へ」「ただ俳句のみに依て現はすことの出来る世界」「怖ろしい真実の力」「(真実とは)ものの心の最も心」「(真実とは)余分のもののちつともつかぬ核」「頭の中でこしらへやうとする作用は少しも入つて居らぬ」「スケッチ版位の小品」「真の絶対を表現した句」「一見まことに古いやうに見えて、しかも千古を通じて新しい」「不器用」「自分の内部に向つてのみ戦つて居る」「意見されて居るか咎められて居るやうな心持になる」「懺悔をする時のやうな心持に誘はれる」

②1931年(昭和6年)「ホトトギス」3月号

「句修業漫談」の面白そうな回を転載　3回目

「秋桜子と素十」

③1931年(昭和6年)「馬酔木」6月号

秋桜子「『自然の真』と『文芸上の真』」

・みづほへの反論

「『真実』といふ言葉は、今、専ら「文芸上の真」といふ意味を以て用ゐられてゐるのである」「今頃『自然の真』のみを説いてゐるのは、いかにも教養の足らざるを曝露して、俳壇のために恥辱だと思ふのである」「真の創作家にとっては、『その花が彼にはどう見えたか』といふことが問題なのである」「素十君の句は『文芸上の真』を持つ句より、次第に『自然の真』のみを持つ句の方へ推移して来た」「芸術的価値少なき作へと低下」

④1931年(昭和6年)「まはぎ」6月号

素十「秋桜子君へ」

・秋桜子への反論

「『自然の真』といふものを僕は知らない。又これに大切なるエッキスといふものを附け加へたといふ『文芸上の真』といふものをも知らない。それを私は少しも恥と思はない。私はただ自然の種々なる相を見ただけである。私の俳句というものはただそれを写さうと試みただけである。この後もそれをつづけて行かうと考へてをる」

「『この花を彼が如何に見たか』といふことが問題であるとは、よく聴く言葉であるが私はそんな風に『この花』を見た事がない。如何に見たかといふ様な考へ方を無くさうくと努力を払つたことはある。私にはただ『この花』だけが大切なのである」

素十の素 ❼1928～29年 「文芸上の真」がない句

1928年(昭和3年)6月号 ＊35歳

157 一辨の疵つき開く辛夷かな

1929年(昭和4年)1月号 ＊35歳

166 揚羽蝶おいらん草にぶら下る

1929年(昭和4年)5月号 ＊36歳

169 おほばこの芽や大小の葉三つ

1929年(昭和4年)5月号 ＊36歳

171 朝顔の雙葉のどこか濡れゐたる

1929年(昭和4年)6月号 ＊36歳

173 甘草の芽のとびとびのひとならび

1929年(昭和4年)6月号 ＊36歳

176 風吹いて蝶々迅く飛びにけり

1929年(昭和4年)7月号 ＊36歳

180 もちの葉の落ちたる土にうらがへる

素十の素 ❽1932～34年　投句復活～ドイツ留学

投句復活

1932年(昭和7年)3月号　＊39歳

189　探梅や枝のさきなる梅の花

1932年(昭和7年)6月号　＊39歳

196　ゆれ合へる甘茶の杓をとりにけり

ドイツ留学

1933年(昭和8年)6月号　＊40歳

219　翅わつててんたう蟲のとびいづる

221　雪片のつれ立ちてくる深空かな

1933年(昭和8年)10月号　＊40歳

231　夏山に向ひて歩く庭の内

232　夏山も歩み近づく如くなり

233　枝かへてまださくらんぼ食べてをる

1933年(昭和8年)11月号　＊40歳

235　白鳥の顔を埋めて巣に籠る

〈白鳥の貌を埋めて流さるる『家』加藤かな文〉

素十の素 ❾1935～46年 後期の注目句

1935年(昭和10年)5月号 ＊42歳

281 春の雪波の如くに塀をこゆ

1936年(昭和11年)2月号 ＊42歳

313 餅搗くや框にとびし餅のきれ

1936年(昭和11年)4月号 ＊43歳

320 歩み来し人麦踏をはじめけり

1936年(昭和11年)10月号 ＊43歳

341 づかづかと来て踊子にささやける

1937年(昭和12年)3月号 ＊44歳

353 ばらばらに飛んで向うへ初鴉

1937年(昭和12年)5月号 ＊44歳

361 大榾をかへせば裏は一面火

1937年(昭和12年)10月号 ＊44歳

372 くもの絲一すぢよぎる百合の前

1938年(昭和13年)5月号　＊45歳

392　泡のびて一動きしぬ薄氷

1938年(昭和13年)10月号　＊45歳

407　ひつぱれる絲まつすぐや甲蟲

1938年(昭和13年)12月号　＊45歳

414　食べてゐる牛の口より蓼の花

1941年(昭和16年)2月号　＊47歳

503　芦刈の天を仰いで梳る

1941年(昭和16年)4月号　＊48歳

509　輪飾のかたまり合うて燃えにけり

1942年(昭和17年)7月号　＊49歳

552　凧の糸二すぢよぎる伽藍かな

1945年(昭和20年)8月号　＊52歳

638　砲音のゆるがす土や麦を蒔く

1946年(昭和21年)5月号　＊53歳

648　雪山の前の煙の動かざる

素十の素 ⑩1923年 再び、俳号について

虚子の虚

・虚数「2乗するとマイナスになる数」

プラス×プラスはプラス、マイナス×マイナスもプラスになる。つまり、ふつうの数では「2乗してマイナスになる数」は存在しない。しかし、現実の物理現象を数式であらわすには虚数が欠かせない。

素十の素

・素数「1と自分自身以外に約数を持たない数(1は素数に数えない)」

純粋数学の分野以外では全く役立たないものと考えられてきたが、現在では、高度な暗号作成のために用いられる。